
LOVE SONG

ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE SONG

【Nコード】

N6196A

【作者名】

ケイ

【あらすじ】

戦争が無く、ちせが最終兵器になっ
ていない文化祭

前奏

「ちせ！」

「シュウジ！」

後ろから二人を呼び止める声がした

「おーアケミとアツシか。どーした？」

アツシは『文化祭のイベント出場者募集』と書かれたチラシを持ちながら言った

「ホラ、来月に文化祭あるだろ？誰でも出れるみたいだし高校最後の思い出作りでさ、一緒にライブしようぜ」

「ライブ？オレ楽器なんて弾けねえぞ」

確かにシュウジには楽器経験などない。あっても音楽の授業で習ったりコーダーぐらいだ

「シュウジは弾けなくてもいいんだよ。ボーカルだからな」

「ボーカル！？」

「拒否権はないぞ。決定事項だ」

「勝手に決めんなよ！」

いきなりやったこともないバンドに誘われ、しかもボーカルをしろと言っただ。シュウジの怒りも当然のものだ

「シュウちゃんやりなよ！かつこいいよ！」

ちせは目を輝かせながら勧める

「何言ってんのちせ、アンタもやるのよ？」

「ええ、あたしも！？」

急に予先が自分に向けられ困惑するちせ

「当然じゃない！ボーカルがいないと成り立たないでしょーが」

「ボーカルって…シュウちゃんじゃないの？」

ちせは疑問に思った。さっきシュウジがボーカルに（無理矢理）決定したはずだ

「アンタとシュウジでツインボーカルなの。1人だけに任せるのも

不安だしね」

勝手に決めといて不安なんて言うのはどーゆーことだ？と疑問が頭をよぎるも、ふと別の疑問が浮かんだ

「オイ、ちよつと待て。お前らは何やんだよ」

「オレはギターだ。趣味でたまに弾いてるからな」

確かにシュウジはアツシのギターを聞いたことがあった。プロとは程遠くとも、素人ながらに上手だと素直に感じたものだ

「アケミは？」

「キーボード」

「アケミそんなの弾けるの！？」

ちせは、男勝りな少女の口から出た、自分の予想を遥かに上回る楽器に驚愕する

「言ってなかった？昔無理矢理習わせられたの。少しは女の子らしいこととしてみるーってさ」

「初耳だよー！」

アツシは少し逸れた話題を戻すように声を張って言う

「で！やるのか、シュウジ、ちせちゃん？」

「どうなの、ちせ？」

ちせは親友に迫られ、「恥ずかしいから正直やりたくない。しかし、少しは興味があるし断りづらい」という気持ちに挟まれる

そして出した答えは

「シュウちゃんがやるならやってもいいかな……」

「よし、シュウジ！」

「やるよな？」

「シュウちゃん……」

シュウジは三人の目が自分に集中するのを感じていた

「…わかった、やるよ」

シュウジは折れた。ここまで懇願されたら男としてやるしかないではないか

「さっすがシュウジ！」

「それでこそ男よ」

「ごめんね、シュウちゃん。付き合わせちゃったみたいで」

「いって。自分で決めたことなんだから」

そう。自分で決めたんだ。謝られる理由は無いし、最後までやり抜くだけだ

そうだ

ぼくらの音はここから始まった

続く

前奏（後書き）

どれくらいの長さになるのか自分でもわかりませんが、しばらくの間お付き合いください

不協和音

休み時間、四人は元軽音楽部の部室に集まっていた。

シュウジたちが通う学校には今は軽音楽部がないので、元々は軽音楽部の部室だった教室を借りている。

「なあアツシ」

「ん？どしたシュウジ」

シュウジがアツシに声をかける

「オレとちせがボーカル、アツシがギター、アケミがキーボードだよな？」

シュウジは昨日決定したメンバーの担当を確認する

「変更はないぞ？」

アツシはまだ不満があるのかと思い、先に答えを返した

「違うって！普通…バンド組むならベースとかドラムも必要なんじゃないねのか？」

シュウジ以外の三人が顔を合わせて叫んだ

「……ああーっ！！」「……」

ちせ、アケミ、アツシの驚愕の声が響く

「そつえばそうだよね……！」

小さく呟くちせ

「アツシしっかりしてよ！」

人に責任を押し付けるアケミ

「オレのせい！？」

自分のせいにされて困惑するアツシ

「問題は山積みだぞ！」

慌て騒ぐ三人に聞こえる様にシュウジは少し叫びながら言った

「一つ目・今言ったとおり、メンバーが足りない」

「これは致命傷だな」

アツシが俯いた

「三つ目・演奏曲が決まっていな」

「…もしかしてアタシたちって無計画過ぎた？」

「……………」

突き付けられた問題を前に、早くも諦めムードが漂い始めた

「だ、大丈夫だよ！あと一カ月もあるし、新しい人探してみようよ！」

ちせが重い空気を払うかの様に立ち上がって言った
シュウジ、アツシ、アケミもゆっくりと顔を上げる

「そうだな…ちせの言うとおりだな」

「よく言った、ちせ！」

「じゃあまずはメンバー探しだ！オレとアケミ、シュウジとちせちゃんチームで早速行動開始！」

…とは言ったもののそう簡単に見つかる筈もなく、ちせとシュウジはクラス中に声を掛けるもすべて断られてしまう
ある人は

「俺、楽器弾けないし…」

と断られ、またある人は

「あたしそーゆーのちよつと恥ずかしいし…」

と拒否される。またまたある人には

「俺たちヨサコイやるんだ。バンドやめてこっちに入らねえ？」

などと断るところか引き抜きまでされかけてしまった

〈放課後〉

「見つかんねーな…」

「そうだね…もう何人に断られたか分かんないよ」

さすがに二人の顔に疲労の色が見え、とぼとぼと歩いていると、前から自分たちと同じ様に暗い顔をした二人組が歩いて来た。

「ようアツシ、どうだった？」

二人の様子から、あまり期待をせずに聞いてみたが、アツシは首を横に振るだけだ

「そっちは？」

アケミもまた、さほど期待していない様子でちせに問い掛けた

「……ゼロ」

「やっぱりね」

やはり予想通りの答えだったらしい

四人は再び部室に集まっていた

学校中を歩き回ったせいで疲れた体を伸ばしながら、アケミがぼやいた

「で、振り出しに戻る、か？」

「まじでどーすんだよ……」

「……もうやめにしねえ？」

「おい、何言ってるんだよ！ふざけてんのか！」

シュウジは、言い出した張本人のアツシの口から「やめる」の言葉が出るとは思いもしなかった

「仕方ねーだろ。いくら声かけても誰も入んねえんじや。」

「そんな簡単に諦めんのか！？そんな気持ちで誘ったのかよ！」

「とにかく！やるなら１人でやってくれよ。じゃ、解散！また明日な、シュウジ、ちせちゃん」

アツシはそう言い残すと部室を出て行ってしまった。

「待ってよアツシ！ごめんね、ちせ……シュウジ……」

そう言っているとアケミもアツシの後について行ってしまった

「あのバカ何考えてんだ……！」

「シュウちゃん……。アツシ君もきつと……悪気があって言ったんじゃないんだよ」

「知るかよ、あんな無責任な奴だとは思わなかった」

拳を壁に打ち付けながら怒るシュウジの顔を心配そうなちせの顔が覗き込み、シュウジは少し冷静さを取り戻した

「あ…わりいな、ちせ。俺たちも帰るか」

「うん……………」

小さくうなづくちせ

それぞれ違った思いを抱きつつ、四人は帰路につく
シュウジの心を映した様に空は暗くよどんでいた

続く

不協和音（後書き）

話の都合上、アツシには損な役に回ってもらいました。ごめんアツシ…

もう少し続きますのでよろしくお願いしますV（^ - ^）V

響き

あれから1週間。シュウジは学校に1度も行っていない
アツシが許せなかった。なぜここまで苛立ちを覚えるのか自分自身
よくわかってない。でも、自分たちがライブをすると決めた決意、
思い出を作りたいと思う気持ち。それらすべてがあの一ことに打
ち碎かれた気がした

……もう、やめにしねえ？

そのたった一言に

「ちくしょう……」

シュウジはベッドに寝転がりながら、天井を睨み付けた。まだ思い
出すだけで腹が立つ

その時、玄関のチャイムが鳴った

「誰だよ……」

父は仕事、母も用事で不在のためシュウジが出るしかない。面倒く
さそうにドアを開くとそこにはちせが立っていた

「こんにちは……シュウちゃん……」

「ちせ……どうしたんだ？」

「ちよつと話したいことがあつて」

「話したいこと？あ、まあ入れよ」

「うん。お邪魔します……」

そのままシュウジはちせを自らの部屋に導いた

「で、話したいことってなんなんだよ？」

「……本当にこのままバンドやめちゃっていいの？」

本当はわかったいたのかもしれない。ちせがそのことを聞きにきた
事を。そのために学校を休んだことも

「アツシにやる気がないんだ。いくら俺がやりたいって言っても仕方ねえだろ」

シュウジはバツが悪そうに目を背けた

「そうじゃない……」

「え？」

「そうじゃないよ!」

普段のちせはとても大人しく、声も小さくてまるで消え入りそうなのだが、そのちせが声を荒げて叫んだ

「アツシ君がどうかじゃなくて……シュウちゃんはやりたくないのか聞いているの!」

「……………!」

ああ……くそ……。彼女にこんなかつこわりいところ見せちゃうなんて……。でも、人のせいにしてる方がかつこ悪いか

「……………やりたい」

「シュウちゃん!」

ちせの顔がバツと明るくなった

「俺とちせとアケミと……アツシと一緒にやりたい」

シュウジが身を起こすと同時に部屋のドアが開いた

「よく言ったねシュウジ!」

そこに立っていたのはアケミとアツシだった

「お前ら……なんでここに……」

「シュウジが学校サボるからだろーが!……まあ、その……悪かった!ごめん!」

アツシはシュウジに向かって頭を下げた

「俺、アケミに殴……叱られてやっとバカな事言ったって気付いたんだ」

「アツシ……」

よく見ればアツシの左頬が赤く腫れているのに気付いた

「ホントごめんな…。もう一度、俺たちと一緒にバンドやってくれねえか？」

アツシは真っ直ぐな目でシュウジを見つめる。その目にはこの間の様な迷いはない

「当然だろ！」

その返答に迷いはなかった

この時、四人は初めて一つのグループとなった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196a/>

LOVE SONG

2010年10月9日13時37分発行